**平成 29 年度霞ヶ浦学講座　第 11 講　結果報告**

実施日時：平成 29 年 11 月 22 日（水）13:30－15:00　　参加者数：42 名

場所：霞ケ浦環境科学センター多目的ホール　　講師：沼澤篤（霞ケ浦環境科学センター嘱託）

共催：霞ヶ浦問題協議会

**テーマ：「霞ヶ浦と人とのかかわり」**

**要旨**：平成 30 年 10 月に第 17 回世界湖沼会議が霞ヶ浦（メーン会場：つくば国際会議場）で開催されます。霞ヶ浦での開催は平成 7 年以来２回目です。世界湖沼会議が再度開催される意義は何でしょうか。私たちは問題意識を共有して世界湖沼会議を成功に導くことが期待されています。それには，近現代における霞ヶ浦と地域社会のかかわりの歴史について時系列的把握が大切です。

江戸期の利根川東遷によって霞ヶ浦周辺は洪水常襲地帯となり，水害対策が大きな課題でした。土浦城下の学者が霞ヶ浦の洪水を考究し対策を提案しましたが，技術的，財政的に困難な時代でした。一方，霞ヶ浦・利根川水系の水運の発達により，霞ヶ浦流域は江戸の商圏に組み込まれ，明治期以後は蒸気船が就航し，水郷観光で賑わいました。また帆引漁法が発展し，水産加工や流通をふくめ，霞ヶ浦の恵みが地域経済を潤しました。

水害対策が本格化したのは戦後です。水害対策を求める地元の要望が強く，霞ヶ浦利根川水系の放水路事業による流出河川の直線化，拡幅，浚渫，築堤が行われました。それによって海水が遡上しやすくなり，塩害が生じたため，昭和 38 年に常陸川水門が完工しました。塩害が無くなったのは，水門操作法が確立した昭和 50 年以後です。霞ヶ浦は淡水化され，湖水は水資源としての価値が高まり，遠方農地への農業用水，鹿島コンビナートや各工業団地への工業用水，筑波研究学園都市はじめ市町村への上水道水供給によって，茨城県南，県西，鹿行地域の経済発展と住民生活の安定に貢献しました。このように霞ヶ浦を取り巻く地域社会の近現代史の前半は湖水との係りが非常に深く，水害を被る一方で霞ヶ浦の生態系サービス（恩恵）を享受したのです。

完全築堤と常陸川水門の操作により，湿田は水害から解放され，土地改良，農機の導入によって安定した生産が可能になりました。蓮根生産も安定しています。しかし一方で霞ヶ浦湖水は，閉鎖性が強くなったことで富栄養化が進み，流域の産業化の進展，生活水準の向上に対し，下水道整備や産業排水対策が間に合わず，アオコ大発生に象徴される水質悪化や生態系の単純化が深刻になりました。ワカサギ漁獲量が激減し，網生簀養殖の鯉が大量死することもありました。それに危機感を抱いた市民や漁業者が立ち上がり，効果的な対策を要望しました。その後，法令の整備，国，県，霞ヶ浦問題協議会，市町村，住民の連携など効果的対策の進展により，また平成７年の第６回世界湖沼会議開催等を契機として県民意識が向上し，霞ヶ浦や流入河川の水質は改善または横ばい傾向です。しかし生態系の多様性の回復をふくめて，水域や項目によっては課題が残っています。２回目の世界湖沼会議開催は「泳げる霞ヶ浦」の復活を目指す地域社会に大きな刺激となり，より一層の努力の必要性が認識されていくでしょう。